

# 近代中国における留日学生の 主要な学習対象

—— 鄒容とその著書『革命軍』を例として ——

常 雲 平・張 周：著  
趙 力 傑：訳

**摘要：**近代の革命宣伝家であった鄒容は日本に留学した時、すでに『革命軍』の原稿を完成していた。この小さな冊子には、自由・共和・天賦の人権といった西洋から伝わった政治観念について一定の紙幅を割いて書かれているが、それに対して日本に言及する箇所はただ六回しかなく、しかもみな一言二言にすぎない。この現象は、中国が西洋のことを理解する過程の中で日本が仲介の役割を果たした度合いを体現するのみならず、清末の日本への留学気運の高まりのなかでも、なお近代中国が西洋を学習の対象とする事実が変わらなかったことを反映しているのである。

**キーワード：**『革命軍』、日本、近代中国、学習の対象

※以下、〔 〕は説明のために訳者がつけたものである。

清末に最も流行した革命宣伝刊行物である『革命軍』に反映された人権思想と民族主義等の内容は学界ですでに広く議論されてきた<sup>(1)</sup>。しかし、いまだ論じがたいのは、『革命軍』は基本的に鄒容が日本滞在中に完成したにもかかわらず、二万字の文章の論述のなかで日本に言及する箇所がたった六カ所だということである。我々は質問を禁じ得ない。なぜ、政治システムの上でやや保守である立憲君主国の日本に留学したのに、このような急進的な革命思想が生まれたのだろうか？ なぜ、日本に留学したこの若い学生は自分の代表的な著作のなかでこのように日本を無視したのか？ 本稿は、鄒容の経歴と『革命軍』の内容の検討から、以上の二つの問題について解答し、更に、近代中国が一貫して西洋を学習の対象としていた事実を明らかにする。

---

<sup>(1)</sup> 例えば：楊慶『鄒容〈革命軍〉之人権思想解析』、『江南大學學報』（人文社會科學版），2003年第5期；周術槐『政治上的激進與文化上的保守——以鄒容的民族主義思想為例』、『貴州民族研究』，2008年第3期；楊瑞松『打造共同體的新仇舊恨：鄒容國族論述中的“他者建構”』、『深圳大學學報』（人文社會科學版），2011年第6期

## 一．日本に留学した学生に革命思想が生じた原因

日清戦争に敗北した後、一部の中国人は日本に注目しはじめ、そして日本へ学ぶべきであると主張するようになった。唐才常は「もしも実学を求めるのであれば、道を日本に借りるのがよい」と主張した<sup>〔一〕</sup>。譚嗣同もまた「中国ともっとも近くて効力がある留学先としては、日本が一番であろう」<sup>〔二〕</sup>と強調した。義和団運動後、清朝政府は「人材の育成は現今の急務」と考え、各省に留学生を選抜させ、成績優秀者を留学させるよう命令した<sup>〔三〕</sup>。同時に、日本の国情をよく理解していた初期の留学生も、日本に留学することを強調し始めた。章宗祥は『日本遊学指南』で日本留学に対して、「路程について言えば、遠くても十日、近くても五日で到着できる。費用は、多くても二百金あまり、少ければ百金あまりで十分だ。学校について言えば、政治・農業・工業・商業・軍備・技術など、完備していないものはない」<sup>(2)</sup>と指摘した。路程は欧米に留学するより短く、費用もまた欧米への留学に比べて少ないことがもとより日本を留学先として選ぶ利点であったが、中国よりも完備した西洋式の教育こそが学生を引き付けた主要な要因であった。鄒容は「中国には完全な学校はない」<sup>〔四〕</sup>と考えていたためにこそ日本に向かったのであるが<sup>〔五〕</sup>、留学により国を救う方途を探求したいと考えていたため、親族の「華舅」に反対されることとなった<sup>(3)</sup>。政府による奨励と初期の日本への留学生からの提言により、西洋の知識への渴望があり国を救いたいという目的を持つ中国青年は日本に留学する道を踏んだのである。しかし、一部の学生は清朝政府が求めるような人材に育たず、かえって保守化した政治に対して急進的な革命思想を生み、清王朝の滅亡に加担する墓掘人を養成することとなった。これは統治力が日増しに弱まってきた清朝政府が中国の近代化を実現できなかったという事実だけではなく、中国人留学生在在日時に見聞したものと緊密な関係があった。

第一に、清朝政府が長期にわたって鎖国の政策を堅持したため、世界の近代化に対する認識が不足しており、近代世界システムに組み込まれた後に自分たちを救済しようとしても、その行動は明らかに緩慢で、しかも積弊は改め難いものがあった。そして終には清朝政府は有識者に捨てられてしまう。アヘン戦争以来、西洋列強による中国への侵略はますます厳しくなっていた。清朝政府の西洋資本主義からのショックに対する反応は緩慢で、太平天国を鎮圧した後にやっと洋務〔近代化事業〕を推進する過程で西洋を学習し始めたのである。しかし、洋務運動の代表的成果であった北洋艦隊が日清戦争で全滅し、清朝政府の「同治〔1862年～1874年〕・光緒〔1875年～1908年〕の中興」も永遠に過ぎ去ってしまったのであった。こうして民族的な危機感が高まり、維新派は変法運動を起こす。し

<sup>(2)</sup> 黄福慶 著『清末留日学生』、臺北：中央研究院近代史研究所，1975，第6-7頁

<sup>(3)</sup> 鄒容は「華舅」（劉華廷）に言われた：「中國之弱，乃是天運盛衰之理，陳陳相因。前滿人盛，今洋人盛，所謂報應。張、劉亦偉人，尚無奈何，天下汝一人豈能挽回。士農工商皆為衣食計耳，汝將英文讀好，即吃著不盡，何必別生他念，若欲為國，試看譚嗣同將頭切去，波及父母，好否自知」。張梅 編注『鄒容集』、北京：人民文學出版社，2011，第72頁

かしすぐに頑迷な保守派の反発に遭い、失敗に終わった。ちょうど少年であった鄒容はかつて維新派に対して希望を抱いていたが、〔維新派の〕譚嗣同が殺された後、「赫赫たる譚君、湖湘の士気は衰えても、ただ願わくは後来のものよ、志を継ぎ消すことなかれ」という詩を作り<sup>〔五〕</sup>、その心情を吐露している。しかし、清朝政府は知識人を失望させることとなった。〔鄒容は『革命軍』のなかで〕列強による中国分割が進行していた時に「我が同胞の土地を割譲し、我らの同胞の財産を奪わせ、それで一家〔清朝の皇帝家〕一姓〔愛新覺羅氏の宗族〕五百萬家奴〔五百万人の「奴才」（家内奴隸）であると自称しうる皇帝の近臣集団である満洲族たち〕のたった一日の安逸を買う」<sup>〔五〕</sup>と指摘し、台湾・香港・大連・旅順・膠州・広州といった中国の領土に対しては「割譲される前においても、割譲された後であっても、みな一紙の公文書すら天下に公布されることは無い」と弾劾、また特にドイツの勢力圏に入った膠州湾について〔清朝政府という賊徒によって山東省の膠州湾が売り払われてしまったからには〕「ドイツ人よ、〔山東省という〕堯王・舜王・禹王・湯王・文王・武王・周公の遺訓の土地を破壊せよ、〔『孟子』『公孫衛上』にいう〕生を受けた人類のなかで未だかつてない存在〔たる孔子〕、神聖にして不可侵なるその孔子の故郷を破壊してしまえ」と〔逆説的に〕述べ、また「この神の国の四万万〔すなわち四億人〕の民衆」をして「教化に浴させず野蛮な状態におかせる」<sup>〔五〕</sup>ものと叫ぶのであった。そして辛丑和約〔義和団終了後の北京議定書〕を締結した後には清朝政府は恥ずかしげもなく「中華の物力を計算し友邦の歓心を買う」<sup>〔五〕</sup>ようになったとするのである。清朝政府は徹底的に零落し、そして一部の知識人は清朝政府の改革への期待を放棄していった。まさに孫文が「八カ国連合軍が北京を攻略したとき、清朝の皇太后〔西太后〕と皇帝は逃げだし、和睦のための賠償金は九万万両〔北京議定書の賠償金は四億五千万両であったが、三十九年の分割払いによる利払いを含めると八億五千万両となり、ここではそれを九万万すなわち九億と表現している〕におよんだため、清朝政府の威信は地を掃い、人民の生活は日々に苦しくなり、そして革命派は「〔今までと違い革命派が〕一般人から浴びせられる罵声は聞かれなくなり、また有識の士は多くが我々のために切齒扼腕し慨嘆してその〔革命の〕事が成らないことを歎いている」状態となり、それまでの「全国の世論はみな我々を乱臣賊子・大逆無道と見なさないものはなく、呪詛面罵の声は耳より絶えることはなく、私がおもむくところで私を認識した者はみな毒蛇や猛獣を見たように恐れ、あえて私と交遊しようなどという者はいなかった」状況は一変したうえ、当時日本に留学していた学生は「おおむねみな頭脳が明晰で、士気も高く、革命の理想にただちに反応する」状態であったため、留学生の間には革命思想がすぐに伝播していった<sup>〔六〕</sup>。これこそが革命をめざす政治結社「同盟会」が日本で設立された原因の一つなのである。

第二に、一部の留学生は清朝政府に失望していったのと同時に、日本での学習を通じて近代西洋の政治体制の優れた点を認識し、中国に、西洋のように資産階級革命によって近代的な政治体制を建設するという希望を抱いたのである。鄒容は『革命軍』に近代西洋の

基準にもとづき、「国」と「国民」を定義し、「一国の政治機関は、その国の人がともに運営し、かりにも政治機関を運営できず、また行政権に参与できないのならば、これを「国」と言うことはできず、またこれを「国民」ということはできない。これは世界の公理であり、万国が共有していることである」としている<sup>[五]</sup>。またいくつかの近代の西洋の制度を通して「文明国」の先進性を説明した。例えば、「〔中国とは異なり〕外国の労働者には〔その国の〕国政に参与して自由の説理を〔さまたげられることなく〕のびのびと述べて民主をつらぬくことを目的とする者がいる。また全国の労働者をあわせ一つの大きな会を建設し、法律を定めて労働を保護しようとする者もいる。さらには集会して演説し、また新聞社を設立して社会について話す者もいる」<sup>[五]</sup>こと、「外国の大商人たちはみな議員となって政権を握っている」こと<sup>[五]</sup>、「文明国のなかでは、もし一人でも非業の死を遂げたものがいれば、かならず新聞に何度も掲載され、場合によっては何十回も掲載されるのである。司法官が案件を審問するときには、もし証拠物件があったとしても、犯人の自供がなければ罪に問うことはない（審問時には酷刑をちらつかせて審問することもない）」<sup>[五]</sup>というのである。最後に、彼は将来の中国の憲法はアメリカの憲法を参照しながら、中国の特性を加味して作るべきであると希望し、また中国の自治法はアメリカの自治法に基づき制定するべきであるとして、さらに「およそ国全体や個人に関すること、外国との交渉のこと、官僚の設置や職務分業そして国家に関することについてはみなアメリカに準じて行うべき」とまで言うのであった<sup>[五]</sup>。それでは、中国はどのような方法により近代的な政治体制を確立しようというのであろうか。実は、鄒容の主張する見習うべき対象から考えれば、その解答を探しだすのは難しいことではない。アメリカの共和政が建立されまた完璧であるのは、まさにイギリスによる植民統治を打倒することを前提としていたためであり、もしも中国がアメリカにならって近代的な政治体制を作るというのであれば、革命という方式によって清朝の封建的専制統治なるものを打倒すればもうすぐに「順理成章」〔筋が通ればおのずとよい文章ができるようにアメリカ式共和政が建設できる〕となるのである。それだからこそ、鄒容は中国での革命の必要性を論述するなかで「フランス人は三回〔1787年にルイ16世を倒した革命、1830年にシャルル10世を倒した七月革命、1848年にルイ＝フィリップを倒した二月革命を指すか〕、アメリカは七年〔独立宣言を行った1776年7月4日から1783年11月19日のイギリス軍撤退までを指すものか〕の革命を戦った。だからこそ中国も革命してまた革命せよ、革命しなくても革命せよ」と叫ぶのであった<sup>[五]</sup>。鄒容は依然としてフランスやアメリカといった当時の共和政国家を例として中国の革命を鼓吹することを忘れないのである。

第三に、一部の日本人の中国人留学生に対する態度は友好的であったものの、日清戦争以降には、日本の民衆は次第に中国を蔑視するようになっていったため、中国人留学生は日の出の勢いで力をつけていく隣国〔たる日本〕に対して民族的自尊心を失い、しかも革命刊行物に影響されて清朝政府の権威に対して疑義を生じていった。日本人の中国留学



生に対する友好と蔑視については、魯迅の仙台医学専門学校〔現在の東北大学医学部〕での経験に観察することができる。この学校の教師であった藤野厳九郎は、毎週魯迅の講義ノートをチェックして「脱漏があれば補い、文法の過ちがあれば、それを訂正してくれた」という<sup>[七]</sup>。藤野先生が気に掛けてくれたからこそ、魯迅はそのクラスで落第するには至らなかったのである。しかし、魯迅の成績はクラスのなかで平均程度であったため、「中国が弱国であり、それゆえ中国人は当然に低能力児なのである」<sup>[七]</sup>という考え方を持つ日本人学生たちは、藤野先生が魯迅に試験問題を漏洩したのだと思ったのであった。一般の日本人の中国留学生に対するこのような見解は、中国人に対する呼びかけ方に直接反映している。じっさい 1896 年には早期の日本留学生十三人の中の四人は日本の子供による「豚尾奴」という嘲笑と日本食に耐えられず、早々に帰国している。鄒容はまたここで「弁髪をひっぱりながら洋服を着てロンドン市街をさまよい歩けば、行き交う人はみな『Pigtail』（訳せば豚のしっぽ）『Savage』（訳せば野蛮人）などと言う。……また東京市街をさまよい歩けば、行き交う人はみな『チャンチャンボッ』（訳せば尾をひく奴才）と言う〔チャンチャンボッは原文ママ。戦前に知られた「乃木大将のしりとり俗謡」で「陸軍の乃木さんが凱旋す、雀、目白、ロシヤ、野蛮国、クロパトキン、金の玉、負けて逃げるはチャンチャン坊、棒で叩くは犬殺し、シベリヤ鉄道あるけれど、土瓶の口から湯気吐けば、バルチック艦隊逃げてゆく、国を守るは陸軍の…」と歌われたように、中中坊（チャンチャンボウ）すなわち中国野郎といった意味だろう。鄒容の述べる「拖尾奴才」の「奴才」（下僕）とは満洲族のみに許された皇帝に対する自称で、皇帝の「下僕」と自称できるほどに近臣である優越感のあらわれでもあったが、清末から民国にかけて過度に下僕根性の満洲族としての意味が強調されていく〕と述べるのであった<sup>[五]</sup>。一部の日本人の中国への好意と日本社会による中国軽視との間の強烈な落差は、中国人留学生が清朝政府への不満を高め、一部の学生は熱心に革命に取り組むようになっていった。1905 年に日本に留学した学生である黄尊三はその日記に湖南省籍の某学生が革命派の人物の情報を清朝政府に密告したため、湖南の学生すべてから孤立してしまったことを書き記している。そして、黄尊三本人もまた「〔梁啓超ら清朝の皇室を保全し立憲君主制を導入しようとする保皇派の運営する〕『新民叢報』を愛読していた」段階から「はじめて〔孫文ら清朝を打倒して共和政を実現しようとする革命派の運営する〕『民報』を読んだ」らすぐに「『新民叢報』よりも価値がある」と思うにいたった過程を経験していた<sup>[八]</sup>。

## 二. 『革命軍』に触れられない日本

鄒容は日本に留学した時に『革命軍』を完成し、当時の中国で革命が必要かどうか、誰の命を革めるのか〔すなわち革命する対象〕、どのように革命するのか、革命の目的や革命が成功したときに建設される制度といった問題を系統的に論述したのであった。しかし

奇妙なことに、中国人の日本留学生を代表する著作であるにもかかわらず、『革命軍』の中で日本に言及した箇所はたった六回だけである。さきに触れたように中国人が「チャンチャンボウ」と呼ばれたことは一回目となる。ついで〔第四章の〕「革命には必ず人種を見分けて明確にする必要がある」の章では四回にわたって言及されている。すなわち「朝鮮や日本もまたわが漢族の植民した土地」であり<sup>〔五〕</sup>、人種の表には日本人が「黄色人種」の下に「中国人種」に分類され、「（皇漢民族は——文脈から筆者が考えるに）改めて日本との国境を越え、また或いは北のかた黒竜江の南岸よりロシアとの国境を越えて侵入する……」<sup>〔五〕</sup>ものであり、「〔残念ながら中国人は清朝に対して順民を自称し、香港人がヴィクトリア記念碑に「徳が天地にあまねく」といい〕台湾人が明治天皇の功德を頌えて「天皇陛下の仁徳はあまねく広くゆきわたる」と記す〔ように異民族に服属したが、これも人種の区別がなかったからである云々〕」<sup>〔五〕</sup>のであるといい、最後に〔第五章の〕「革命では必ずまず奴隷根性を払拭せねばならない」の一章では「日本の議院には台湾人の足跡はない」<sup>〔五〕</sup>と指摘するのであった〔台湾人初の議員は辜顕栄の昭和9年（1934年）7月の貴族院議員勅撰で、昭和20年（1945年）4月1日には「朝鮮及び台湾住民の国政参与に関する詔書」により衆議院議員となる道も開かれたが選挙の行われぬまま日本は敗戦し「台湾人」は日本国籍を離脱した〕。こうした日本に関する論述からみると、これらはおおむね満洲族と漢民族とが人種を異にすること、また国民の奴隷的根性を明らかにすることのために執筆されており、日本の政治について称揚するような意志を見いだすことがまったくできない。この現象は表面上こそ鄒容が日本に留学した理由と符合しないが、実際はかえってここに〔『革命軍』の叙述が〕発生した必然性を有するのである。

第一に、中国人の日本留学生が学習した近代的観念は西洋から渡ってきたものであった。近代西洋の自由・平等・天賦の人権といった思想は、『革命軍』でも度々触れられている。鄒容は満洲族を駆除するのは「我が〔『春秋左氏伝』桓公二年の記載から〕〔という礼楽典章の制度をもつ〕祖国を恢復し」、「我が天賦の権利を回収し」、「我が生をうけて以来の自由を取り戻し」、「人々の平等の幸福をあがなう」<sup>〔五〕</sup>ためであると明確に宣言したのであった。「平等自由の大義」を説明した時にも、「生まれてより人はみな自由であり、平等である」ものであり、君と臣といった差別はまったく存在しないと述べた<sup>〔五〕</sup>。将来の中国を構想するにあたって、鄒容は「国民となれば、男女は一律平等であるべきで、また貴賤の差があってはならない」し、「各人にはこれを奪う権利はなく、すべて天から授けられたものである」から「生命や自由そして一切の利益については、すべて天賦の権利なのである」ため「〔何びとも〕他人の自由、たとえば言論、思想、出版といったものを侵すことはできない」<sup>〔五〕</sup>とするのであった。そして甚だしきにいたっては、黄帝の子孫〔たる中国人〕が学習すべき対象は西洋の歴史的人物であるワシントンやナポレオンを代表格としたのであった。以上から分かるように、鄒容は日本に留学したものの、ただ言論・出版が相対的に自由な環境下で〔ある日本で〕さらに多くの近代的西洋の知識を得たのであって、それ

は「私は幸いにも吾が同胞の得たルソーの『社会契約論』、モンテスキューの『法の精理』、ジョン・スチュアート・ミルの『自由論』、〔トーマス・カーライルのものか〕『法国革命史』、〔ジェファーソンの〕『アメリカ独立宣言』などの書籍の翻訳を読んだ」という感慨からも十分に理解できる。

第二に、鄒容は滞在期間が短かったため、日本の勃興に対して十分に認識していなかったのだろう。同時に日本の国際的地位は鄒容の留学した期間にはまだ欧米列強と同列に並ぶものではなかった。鄒容は1902年9月から10月にかけて日本に到着、翌年の3月には張継とともに南洋学監の姚煜の弁髪を切ったため強制的に帰国させられた。日本に留学すること一年にも満たない彼は、日本を全面的には理解できなかったはずである。それでは、どの国について比較的よく理解していただろうか。鄒容はアメリカの制度を将来の中国の手本と考えていたわけだから、アメリカは当然ながら比較的よく理解していたことであろう。この他、「早く満洲人の束縛から脱出したとして、私はイギリスを、ロシアを、ドイツを、フランスを恐れる。とはいえきばをむき出し爪をふるい〔凶暴さをむき出しにして〕我が中国を蚕食し分割しようとしている者も、また気をひきしめ息をこらし我が權威をおそれ我が勢力を警戒するであろう」<sup>〔五〕</sup>とする可能性の指摘からは、我々は鄒容が日本がこれらの国々と並ぶものではないと考えていたことを知ることができよう。実際、遅れて来た資本主義国である日本は、日露戦争以前はいまだ世界の強国ではないと認識されていた。明治維新以降、日本は西洋諸国と締結した不平等条約を少しずつ修正していったが、関税自主権は1911年になってようやく取り戻したものであった。下関条約を締結したのちもすぐに日本はロシア・ドイツ・フランスの三国干渉を受け、条約に明記されていた遼東半島の割譲を放棄させられたのであった。その後、イギリスと同盟を結んだことでやっとロシアと闘争することができるようになったのである。すぐに1905年には日本は日露戦争で勝利を手にし、西洋列強の中で国際的な声望を得て、やっと名実ともない帝国主義国の一員となったのであった。

第三に、鄒容が『革命軍』を執筆した主要な目的が四万万〔すなわち四億人の〕同胞を革命へと導くことにあり、日本の政治における保守的な傾向が革命を喧伝することと合致しなかったことがあるだろう。鄒容は「革命とは、天演〔社会進化〕の公例である。革命とは世界の公理である。革命とは存亡を争う過渡的時代の重要な意義である。革命とは、天に順い人に応えるものである。革命とは、腐敗を払拭し良善なるものを推奨するものである。革命とは、野蛮から文明に進むものである。革命とは、奴隷を禁じて彼らを主人とするものである」<sup>〔五〕</sup>と指摘している。1688年のイギリスの〔名誉〕革命、1775年のアメリカの独立革命、フランスの三回の革命は上述の革命の標準と合致するもので、だからこそ文中に何度も出現するのであろう。じっさい、革命なかでも民族革命と関係ある内容はよく具体的に描写されるのである。例えば「十三州の独立、ドイツの連邦形成、イタリアの統一、試みにこうした革命時代の歴史を読めば、それは民族の士気を鼓舞し、君主と戦

い、帝制を打ち倒し、貴族を誅殺し、自由を唱え、自治に努め、内に戦闘状態を停止し、外に外国と対抗することにある」<sup>[五]</sup>と述べているし、場合によれば列強の民族に属さないアイルランドでさえ、鄒容にとってみれば他民族に反抗して自治を勝ち取った例と認識されるのであった。逆に当時の日本を見れば、1889年に公布された『大日本帝国憲法』には「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」「皇位ハ皇室典範ノ定ムル所ニ依リ皇男子孫之ヲ継承ス」「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」と明確に規定されていた。天皇は国家元首であり、また陸海軍の統帥であり、内閣の権力は議会より高く、天皇に対してのみ責任を持ち、国民は「臣民」と呼ばれ、臣民が持つ選挙権は性別と財産によって制限されていた。これはみな鄒容の述べる「満洲人の立てた皇帝を誅殺して、以降の万世にふたたび専制君主が立つことのないよういましめる」、「全国は男女を問わずみな国民である」<sup>[五]</sup>という社会理想とは遠く離れていたものであった。

### 三. 近代中国の学習した主要な対象——西洋

以上の分析から、中国人学生は形式上こそ日本に留学していたものの、実質的には西洋文化と接触していたことを簡単に見出すことができる。この事実は当時の清朝政府が日本へ学生を派遣した目的とも合致しており、また日本の「西学東漸」〔西洋の学問が東方へ伝播すること〕の仲介的な立場と関連したもので、中国近代化の成果にも表れたのであった。

そもそも、清朝政府が日本へ留学生を派遣した目的は、西洋を学習することによって、王朝の生命を延長したいと願ったからであった。アヘン戦争以降ほどなくして、魏源は『海国図志』の中で、西洋を学習するのは「夷狄の長じている技術を学習して夷狄を制する」ためであるという思想を表明していたが、統治者の注意を引くことはできなかった。後に開明的な地主〔と規定されている曾国藩、左宗棠、李鴻章といった人物を指すか〕によって洋務運動が提唱されると、清朝政府はやっと西洋の先進的な技術を学習すべく行動を開始した。日清戦争以降に起こった維新運動は近代西洋の政治思想を伝えて西洋的な君主立憲国を建立するという内容を持つものであった。すなわち近代中国はずっと西洋を進歩した手本と見なしてきたと言ってもよい。清末に日本へ留学する気運が高まったことも例外ではなく、張之洞の『勸学篇』では「一年間留学することは、西洋の書物を五年間読むことに勝る……外国の学校に一年通うことは、中国の学校に三年通うことに勝る」<sup>[九]</sup>という記述でも、中国の学習対象が西洋と外国にあると明確に記している。彼は日本が西洋を学習した成果を肯定したうえで、日本を成功例として分析し、「日本は小国に過ぎないのに、どうしてこのように急速に発展したのだろうか。伊藤〔博文〕・山縣〔有朋〕・榎本〔武揚〕・陸奥〔宗光〕らは、みな二十年ほど前に外国へ留学した学生であった。そして自国が西洋に脅かされていることに憤り、同志百人あまりを率いてドイツ・フランス・イギリスを訪



問し、政治や工業、経済、陸海の戦術を学び、学習を終えて帰国すれば將軍や大臣といった政府高官に登用され、政治は一変し、東洋を勇壮に見渡すほどになった」<sup>[九]</sup>という。これを見ると、張之洞の目には、日本の崛起はまさに西洋を学習し、実現としたものであると映っていたことがわかる。そして日本は西洋を学習してすでに莫大な効果を上げており、欧米とくらべてなおまだ「路が近く費用を節約でき、より多くを派遣することができる」し、「中国から近くにあり、考察に容易」であり、「東文〔日本の文〕は中文〔中国の文〕に近く、理解に簡単である」うえ、「西洋の学問はとても数多いが、西洋の学問で是非とも必要というほどではないものについては、日本人がすでに簡潔にしたり適宜あらためたりしてくれている」し、「中国と日本の情勢や風俗は似ており、模倣する上で簡単である」<sup>[九]</sup>として、中国人を日本へ留学させる吸引力があったにもかかわらず、あくまで張之洞は最後に「もし詳細を求めまた完全を求めるのならば、そこで西洋に赴くのはどうして不可であることがあろうことか」<sup>[九]</sup>と強調することも忘れず、もし日本で学習したことを詳細にそして完全なものとしたいと考えるのならば、やはり西洋にいかねばならないと指摘したのであった。だからこそ、清朝政府の日本への学生派遣政策でも、西洋を学習するという範疇を離脱しなかったのであった。

次に、日本の明治維新そのものが西洋を学習する過程であったため、日本の成功こそが中国へ日本を通じての西洋理解を可能としたのであった。明治政府は「文明開化」政策の方針のもと、多くの留学生を西洋に派遣して学習させ、同時にまた多額の報酬を出して西洋の学者や技術者を日本へ招聘し、自国の人才を育てさせた。下層の国民もまた衣食住など生活のさまざまな面すべてで西洋を学習し、ひいては〔日本の〕統治集団の上層部は日本を「欧州化した帝国」<sup>[十]</sup>へ変化させて、英語を国語として、欧米人と通婚関係を結び、日本人種を改良していこうと求め始めたのであった。まさに無我夢中に西洋化したからこそ、日本はやっと近代アジアで西洋に学び最も成功した国となった。そしてこの日本の成功こそが中国の西洋学習の近道となったのである。ある学者は「中国が西洋文化を輸入する過程で、日本はとても重要な役割を果たし、中国は日本から少なからざる西洋文化を間接的に獲得することができた」と指摘している<sup>[十一]</sup>。この「間接に獲得」したのはおおむねまさに日本に留学した人々の翻訳活動によって得られたことを意味する。1900年、中国人日本留学生によって組織された最初の翻訳団体である訳書彙編社が成立した。その『訳書彙編』創刊号には、鄒容の『革命軍』でも言及された『法的精神』と『社会契約論』が掲載された。それらの西洋の著作の中訳版は、おそらく日訳版からの重訳によって完成されたものである。その後の数年間で、日本留学生により翻訳された日本の書籍の数は大幅に増加し、同時期の西洋の書籍の翻訳活動を大きく上回ったのである。1901年から1904年までに出版された533種の書籍のうち、321種が日本人の著作であるのに対し、英・米・仏・独・露といった西洋人の原著からの訳本は合わせて131種に過ぎない<sup>[十二]</sup>。しかしそれでもなお、我々はなお〔翻訳された〕一部の日本人の著作から西洋の影響を見出すこと

ができる。たとえば、上野貞吉〔ママ。上野貞正か〕の『欧米政体通覧』〔東京堂より1901年刊行。1903年に顛涯生により『歐美政體通覧』として翻訳された〕、矢島元四郎〔ママ。アメデー・ガブール（Amédée Gabourd）の『拿破崙全伝』を翻訳した矢島玄四郎か〕の『ナポレオン伝』〔斯文館より1888年に刊行。蔡民友により翻訳された。原著者の名前は康熙帝愛新覺羅玄燁の名を避けたものか〕、村井知志〔ママ。村井知至か〕の『社会主義』〔労働新聞社より1899年に刊行。1903年に羅大維により翻訳された〕は、近代西洋の政治制度や歴史人物そして社会思潮を紹介するもので、その内容はみな日本の伝統文化が源流となっているものではなかった。ここからも我々は中国が西洋を学ぶ過程において日本が仲介者の役割を演じたことを断定できよう。

三番目に、中国近代化の成果は例外なく西洋の事物とみなされたものと関係があるが、それらの学習成果の重点や獲得した経路も時間的に異なっていく。19世紀も60年代から90年代にかけては、洋務派官僚は西洋の軍事技術を勉強することを提唱した。この理念が文化活動の領域にまで波及したため、中国国内で翻訳された西洋の自然科学や応用科学に関する書籍は1850年から1899年までの訳書全体の70%を占めることとなった<sup>〔十一〕</sup>。1895年より以後は、民族の危機が日増しに高まることとなったため、〔清朝を護持し体制改革を目指す〕維新派と〔清朝を打倒する〕革命派はどちらも内政より富国強兵を目指すと主張し、両者のこの観念に応じて西洋の人文科学や社会科学に関する訳書が大幅に増加し、自然科学と応用科学の割合を超えていったのである。1880年から1904年までにかけて翻訳された日本の書籍では、宗教哲学類は4%、文学類は13%、社会科学類は32%、歴史地理類は11%、その他の雑録が10%を占めたのに対し、自然科学と社会科学は30%を占めるに留まった<sup>〔十一〕</sup>。この前と後とでは重点に変化が生じたことは明らかである。学習経路においても、前期の成果は主に直接に西洋資本主義諸国から導入され完成したものであった。例えば、当時の世界で第六位、またアジアで第一位と讃えられていた北洋艦隊は基本的にイギリスとドイツの戦艦を購入して組織されたものであった。後期の成果は主に日本の勃興ののちに間接的に学習された基礎のうえで建設されたものであった。例えば、重慶の最初の近代工業企業——森昌洋火公司〔1889年に四川商人の盧幹臣らが日本より帰国して建設した森昌泰自来火廠が原型〕——の蒸気機関・植字機・旋盤といった設備はみな日本から導入されたものである。近代化の成果を達成した方法は同様ではなかったが、強力な戦艦、威力ある砲台〔といった近代的兵器〕にせよ生産機器にせよ、さらには立憲君主政や共和民主政といった政治制度にせよ、すべて最初は西洋に発生したものであった。西洋の要素が中国近代化の成果へ立ち現れることはここからも類推できよう。

## おわりに

近代中国が学習した主要な対象は西洋であり、日本は仲介者の役割を果たしたに過ぎな

かった。では、中国人日本留学生は近代の中国と日本との文化交流に対して何ら役に立たなかったのであろうか。もちろんそうではなく、留学生は日本に関する著作を執筆し日本の書籍を翻訳したことにより、中国人へ日本を理解する近道を提供し、ある程度に中国人の日本留学ブームを加速させた。そして、中国人日本留学生は日本に絶え間なく流入し、日本に対し自身の留学教育政策を調整させるべく迫ったため、1905年には留学生たちは日本政府の「取締規則」に対して集団で抗議を行うにいたった<sup>〔一三〕</sup>。また一部の留学生は学業が終了して帰国した後、日本で手に入れた技術を利用して自分なりの組織を建設し、故郷の近代化を加速したのであった。例えば、江津の人であった（現在は重慶市に属する〔江津区となっている〕）何鹿蒿は1907年に帰国した後、ただちに重慶市江北区の劉家台に鹿蒿玻璃廠〔ガラス工場〕を建設した。その生産品は四川全土に拡がり、1911年のパナマ万国博覧会では一等賞を獲得したのである。何鹿蒿は近代の「四川ガラス工業の創業者」となったのであった。

この他に、日本が中国留学生に与えた影響も無視できない。特に、留学生が西洋書籍を翻訳した際には、日本の翻訳した漢字語彙を借用して西洋の先進的な思想の伝播を行うこととなった。例えば、もし留学生が、日本人がもともと中国の古籍に見られた「革命」という言葉で英語の「revolution」を表現したことを吸収していなければ、中国人の「革命」に対する認識は恐らく「湯武革命」〔夏王桀が湯王に打倒され殷となり、殷王紂が武王に打倒され周になった革命〕に止まり、『革命軍』という書名も中国に出現しなかったことであろう。同様に、経済・義務・幹部・支部・進化・警察・会社・会費といった日本語の語彙が西洋文化の中国への伝播を促進したのであった。

一国の文化の生命力とは往々にして国家の実力に伴って盛衰し消長するものである。近代以来、中国と日本の伝統文化は武力を背景とする西洋文化の前で劣勢におかれた。であればこそ、両国ともに西洋を学習することにより国家の弱体を改変しようとしたのである。その異なる点は、日本は明治維新を通じて民族の危機から脱出し、清朝は西洋を学習する途上で何度も壁にぶつかることとなった点である。なかでも日清戦争では日本が中国を圧倒したため、日本の国力が中国を超えたのは争う余地の無い事実となり、日本の文化もまた中国の伝統文化に対して優勢にたつようになったのである。しかし、その時の日本文化とはすでに伝統的な文化ではなく、近代の西洋文化の要素が混合したものとなっていた。中国が留学生を派遣した目的は、まさに本質的に西洋から伝播された文化を学習することにあつた。ここから考えれば、近代中国の主要な学習対象は日本留学の機運の高まりとともに変化したわけでは決してなかったのである。

## 参 考 文 献

〔一〕 湖南省哲学社会科学研究所編：《唐才常集》，中华书局1980年版，第151頁

- [二] 蔡尚思、方行编：《谭嗣同全集》（增订本）下册，中华书局 1987 年版，第 344 页
- [三] 《光绪朝东华录》第 4 册，光绪 27 年辛丑，第 102 页（总 4720 页）
- [四] 张梅 编注《邹容集》，北京：人民文学出版社，2011，第 72 页
- [五] 张梅 编注《邹容集》，北京：人民文学出版社，2011，第 72 页
- [六] 孙中山 著 牧之 方新 守义 选注《建国方略》，沈阳：辽宁人民出版社，1994，第 91 页
- [七] 鲁迅《藤野先生》，《朝花夕拾》，北京：人民文学出版社，2000，第 73 页
- [八] [日] 实藤惠秀 著 谭汝谦 林启彦 译《中国人留学日本史》，北京：生活·读书·新知三联书店，1983，第 129-130 页
- [九] 张之洞 著《劝学篇》，桂林：广西师范大学出版社，2008，第 72 页
- [十] 近代日本思想史研究会，近代日本思想史第 2 卷，北京：商务印书馆，1992，第 5 页
- [十一] 黄福庆 著《清末留日学生》，台北：中央研究院近代史研究所，1975，第 160 页
- [十二] 张静庐 辑注《中国近代出版史料二编》，北京：中华书局，1957，第 100-101 页
- [十三] 李喜所，李来容《清末留日学生“取缔规则”事件再解读》，《近代史研究》，2009 年 第 6 期

（平成 24 年 12 月 12 日から 15 日の間、重慶師範大学学術訪問団の一員として常雲平先生が来学された。せっかくの機会であり、なにか東アジア近代史に関する特別講義を、とお願いしたところ、先生は心よくお引き受けくださり、歴史学科河西ゼミの学生を対象に一場の講義を試みられた。本稿は、その講義の原案となった先生のご論文の全訳である。常先生、および当日の通訳・本稿の翻訳を担当していただいた趙力傑君（東北大学大学院生）にあらためて御礼申しあげたい。谷口 満 記）